NAGASAKI UNIVERSITY

教育学研究科
長崎大学　教職大学院
Nagasaki Graduate School of Education　Master of Education(Professional) Program
NEWSLETTER No.12
ニュースレター
2015.2

実践と理論の融合を目指して

「教育実践研究」成果発表会　大学院での学びを17名が発表

２月13日、教職大学院生による研究成果の発表会が開かれました。17名の院生の発表の後、活発な質疑応答がなされました。本研究科教職実践専攻はこれまでは､｢子ども理解・特別支援教育実践コース｣｢学校運営・授業実践開発コース｣｢理科・ICT教育実践コース｣｢国際理解・英語教育実践コース｣の４つのコースがありましたが、今年度からは｢理科・ICT教育実践コース｣と｢国際理解・英語教育実践コース｣が｢教科授業実践コース｣に再編され､｢学校運営・授業実践開発コース｣は｢学級経営・授業実践開発コース｣として新しいスタートを切っています。したがって､｢理科・ICT教育実践コース｣と｢国際理解・英語教育実践コース｣はコースとしては今回が最後の発表となりました。　近年文科省の方針により、教育学部の将来の方向性がより明確に打ち出されてきております。１つは学部の小学校教育への重点化であり、もう１つが教職大学院の強化であります。現在全国に24ある教職大学院を将来的には国立大学を中心に各県に設置する方針が進められております。加えて教科内容をどのように教職大学院に組み入れていくかも、全国教職大学院協会の主要なテーマの１つになっております。本学は全国に先駆けて教科の一元化を果たしましたが、その成果が顕現するのはいましばらく時間がかかるのではないかと思われます。

しかしながら、教科以外の教職大学院は開設からすでに６年が経過しており、今現在この教職大学院に於ける実践研究がどのようなものであるかを広く知っていただく機会として、この成果発表は重要な活動の1つとなっております。

本日の発表が教育現場との架橋となり、実り多いものとなりますよう祈念いたしております。

「聴き取る力」を育てる音楽科の学習
―聴き取った音楽から思考判断する活動を通して―

教科授業実践コース　永吉　由紀

全ての音楽活動は聴く活動に支えられている。つまり聴き取ることができなければ、表現することはできない。教師は聴く活動を授業の中に適切に位置付け、授業を展開していかなければならない。そのためにはまず、聴き取らせたい曲想や要素を明確にした上で、聴き取らせる視点を子どもに持たせる必要がある。また子どもが自分の耳で聴き取ったことから思考判断する学習活動を仕組むと、子どもは集中して音楽を聴き取ることができるようになる。他と聴き比べることで違いを捉えやすくなる比較聴取も有効である。本研究ではこれらのことについて、歌声を育てる歌唱の授業や楽器の音色を聴き取る鑑賞の授業の実践を通して、明らかにした。

中学校国語科における文学作品の読解指導に関する実践研究
―意見交流を取り入れた授業の考察を通して―

子ども理解・特別支援教育実践コース　川口　純子

本実践研究では、中学校における文学作品の読解指導を行う中で、課題設定と授業形態の工夫により、生徒が互いの〈読み〉を交流させ、物語にひたりつつ主体的に読む力を身につけるための教授法の検討を目的とした。方法は、生徒の「交流前の読み」と「交流後の読み」の変化を比較し、交流が個の〈読み〉に与えた影響についての分析を行った。ワークシートの記述内容の分析からは、81.3％の生徒に交流後の変化や付け加えが見られ、96.3％の生徒が物語の筋を文脈に沿って読み取ることができていたことが示された。結果から、文学作品の読解指導を行う中で生徒同士の意見交流を取り入れることは、生徒の読解を深めさせ、新しい視点や価値観の発見につながることが示唆された。

21 世紀型の資質・能力を育む総合的な学習の時間のカリキュラム開発方法
―ワークショップ型研修の実践を通して―

学校運営・授業実践開発コース　畑島　英史

ATC21ｓの21世紀型スキルと国立教育政策研究所の21世紀型能力を背景にこれからの時代に必要な力であり、｢生きる力｣の要素が21世紀型の資質・能力である。初期社会科や総合的な学習の時間の研究開発学校などの実践から21世紀型の資質・能力の要素を比較し、照合して総合的な学習の時間の｢カリキュラム開発に必要な要素11ポイント｣を抽出した。この要素を生かしたカリキュラム開発をワークショップ型研修で実践した。学校実践実習監において、校内研修授業部の教諭とワークショップを行い、カリキュラムを協働で作成した。また、チェックリストをもとに見直すことにより、評価改善され、系統性のあるカリキュラムを作成することができた。

児童の授業参加行動を高めるための
ユニバーサルデザインによる授業づくり

子ども理解・特別支援教育実践コース　井上亜衣子

児童の授業参加行動を増やすことを目標に、上手な話の聞き方を意識づける授業、ユニバーサルデザイン授業、集団随伴性を伴うセルフモニタリング活動を小学校４年生の２学級に行った。効果を検討するために、タイムサンプリング法で得たオンタスク行動の生起率のデータを単一事例研究法の効果判定規準(レベル、安定性、トレンド)で分析した。上手な聞き方を意識づける授業は、きちんと話を聞くことがなぜ大切かを考えさせる活動を行った場合に、オンタスク行動を増やすことが示された。ユニバーサルデザイン授業はオンタスクの安定性を高め、セルフモニタリング活動はそれまでの授業で高められたオンタスク行動を高いレベルに維持するのに寄与していることが示唆された。

知的障害特別支援学校のキャリア教育に関する実践研究
―高等部段階における福祉科を中心に―

子ども理解・特別支援教育実践コース　下山　美麗

本実践研究は、基礎研究として高等部段階のキャリア教育の全国動向について整理した。それを踏まえ、実践研究では高等特別支援学校の職業科を中心にキャリア教育を実践して、指導の系統性の深化や学習を日常へ般化する手立て、有効な教材の開発方法、等を明確化することを目的とした。基礎研究では、①福祉科実践校は増加傾向にあるが、進路開拓など多くの課題があること、②全国的に資格取得や校内検定などの取り組みに力を入れていること等が明らかになった。また実践研究では、①多角的な視点から授業実践の重点を明確化すること、②キャリア教育と他の指導領域を関連付けること、③継続的に活用できる教材を開発・改良すること等の重要性が確認できた。

自己肯定感を育てる道徳授業に関する研究
―「未来からの振り返り」の実践を通して―

学校運営・授業実践開発コース　岡崎　耕

子どもの自己肯定感を育てる道徳授業の方法を研究しています。特に、子どもが自分を見つめて、振り返る仕方に注目しています。本研究で探究したのが､｢未来からの振り返り｣です。従来の振り返りは、今までの姿を思い起こして、自分を見つめるものでしょう。一方で､未来からの振り返りは､なりたい姿を思い描き、これから成長していく自分を見つめるものです。連想法の評価結果によると、未来からの振り返りを終末に置いた道徳授業は、子どもの自己肯定感を育てるものでした。更に、価値についてしっかり考えさせること、子どもの成長に必要な物語を聴かせること、の2つこそが自己肯定感を育てるのに重要だとわかりました。

子どもの地域認識と諸能力を育む教育の研究
―生活経験マップ活用を通して―

学校運営・授業実践開発コース　濵浦　　翔

本実践研究では、地域と子どもとの関わりに焦点を当て、子どもの独自の地域感覚を地域のマップ(生活経験マップ)に表現し、生活している環境の中で必要と考えられる諸能力を支える一提案として示すことをねらいとした。実践授業では､①地域を４つに分類しマップ作成､②自由にマップ作成の２通りの方法で行った。マップを分析していく中で、子どもの原風景をもとにこれまでの経験が描かれており、住んでいる地域や校区によってもそれぞれの姿が見られた。一方、子どもの諸能力を支える提案として十分な成果が得られなかった。これについて長期的な視野で取り組む必要があると考える。本研究で得られた成果と課題を今後の実践に生かしていきたい。

小学校理科授業における班活動改善の試み

理科・ICT教育実践コース　梶山　円貴

小学校の理科授業では、班活動が多く取り入れられているが、実習校における調査では児童の約1/3が理科授業で行われる班活動に対し嫌悪感を抱いていることが明らかになった。そこで、従来の班活動よりも班の規模を縮小することで一人一人が実験を行えるように工夫して理科授業を行った。その結果、すべての児童が班活動に参加でき、さらに従来よりも班における話し合い活動が活発化したことが明らかとなった。また、従来班活動に対し嫌悪感を抱いていた児童や、班活動に消極的だった児童が、班活動に参加することで、班活動に対する態度や考え方に変化が見られたことから、班活動の楽しさをある程度実感させることができたと考えられる。

より効果的な速読のあり方を求めて
～教科書を用いた速読指導についての実践研究～

国際理解・英語教育実践コース　南　美喜子

現代のグローバルな社会では、国際共通語としての英語の情報を即座に読みこなす｢速読力｣が必要とされる時代である。また、速読は、リスニングなどほかの３技能を伸ばす上でも効果的だと言われている。

そこで、本研究では｢教科書英文での速読指導は可能であり、生徒の読解力を高めることができる｣という仮説を立て、事前・事後テストを適用し、速読指導の効果を検証した。その結果、事後テストの上昇に有意な差が見られ、仮説が概ね支持された。

処理すべき英語情報量は年々増加する傾向にあり、速読力向上を目指した学校での指導は、社会に必要とされる英語能力育成の上でも効果的だと思われる。本実践研究が今後の発展的研究につながっていくことを期待するものである。

外国語科における語彙の定着を目指した指導の研究

国際理解・英語教育実践コース　吉田真理子

本研究では、高等学校の英語の授業において、付加情報(①二語以上のまとまり②派生語③意味上の関連語)とともに指導する単語と､④そうでない単語、に教科書の新出単語を分類して指導を行い、一定時間後に３回単語テストを実施して単語の定着度を調べた。

研究の結果、約２週間では生徒は新出単語をほとんど忘れておらず、記憶保持していた。また、今回の研究からは語彙指導の方法の違いによって定着度に差があるとは統計的に言えなかったが、付加情報とともに指導した単語に関して遅延テストで正答率が維持されていたり上昇したりしている生徒もいたことから、付加情報とともに語彙を指導することが記憶定着にもたらす効果や可能性が示唆された。

発表者とテーマ

【3 年プログラム】

1　井上亜衣子
　児童の授業参加行動を高めるためのユニバーサルデザインによる授業づくり

2　下山　美麗
　知的障害特別支援学校のキャリア教育に関する実践研究
　ー高等部段階における福祉科を中心にー

3　佟　　韜慧
　児童が異質な集団で交流できる能力を育むための研究
　ー児童同士の関係作りとチームの協働性を中心にー

【2 年プログラム】

4　近藤　友美
　病気の子どもにおけるコミュニケーション能力の育成に関する実践的研究
　ー自立活動におけるアサーション・トレーニングの取り組みを通してー

5　玉利　　彩
　児童の自己開示を促進するための実践研究
　ー絵本の読み聞かせを用いてー

6　岡崎　　耕
　自己肯定感を育てる道徳授業に関する研究
　ー｢未来からの振り返り｣ の実践を通してー

7　田中　淑香
　子どもが自他を見つめつなげる授業実践研究
　ーESD を基盤とした授業の再構成と教師の省察に着目してー

8　濵浦　　翔
　子どもの地域認識と諸能力を育む教育の研究
　ー生活経験マップ活用を通してー

9　梶山　円貴
　小学校理科授業における班活動改善の試み

10　喜久　優佳
　中学校英語科におけるプレ・リーディング活動について

11　岸川奈津美
　英語リスニングにおける bottom-up 処理の力を支える発音指導
　ー語と語の連結による音の変化を取り扱った発音指導に焦点を当ててー

12　南　美喜子
　より効果的な速読のあり方を求めて
　ー教科書を用いた速読指導についての実践研究ー

13　吉田真理子
　外国語科における語彙の定着を目指した指導の研究

【現職教員院生】

14　出口　康子
　通級指導教室における書字指導の実践
　ー小集団指導でのタブレット PC の活用を通してー

15　川口　純子
　中学校国語科における文学作品の読解指導に関する実践研究
　ー意見交流を取り入れた授業の考察を通してー

16　永吉　由紀
　｢聴き取る力｣ を育てる音楽科の学習
　ー聴き取った音楽から思考判断する活動を通してー

17　畑島　英史
　21 世紀型の資質・能力を育む総合的な学習の時間のカリキュラム開発方法
　ーワークショップ型研修の実践を通してー